



女性用パーカ

コリヤーク

カムチャツカ

丈142cm (フードを含む)

北方民族博物館だより
一第31号一

第13回特別展「人、イヌと歩くーイヌをめぐる民族誌ー」	2
講座「人とイヌとの関わり」	
講演会「人、イヌと歩くーイヌをめぐる民族誌ー」	5
講習会・博物館クラブ	7
平成10年度海外民族調査報告	8
参加報告	10
News	12

人、イヌと歩くーイヌをめぐる民族誌ー

イヌ(食肉目イヌ科)は、人とのつながりが非常に深い動物です。人と一緒に暮しはじめた最初の動物とされていますし、人とのつきあいたいへん幅広いものになっています。特に北方の諸地域では、イヌは数少ない家畜として人びとの生活の中で重要な役割を果たしてきました。

今年度の特別展では、人とイヌとのつきあいの歴史をはじめ、世界各地の人とイヌの関わりについて「狩猟のパートナー」、「家畜を守る・誘導する～牧畜～」、「雪原を駆ける～そのけん引～」、「素材としての利用」のコーナーで紹介しました。

* * *

■人とイヌのつきあいの歴史

イヌの祖先がどんな動物だったのかについてはいくつかの説がありますが、近年ではオオカミがイヌの主要な祖先であるという考え方が一般的なものとなっています。イヌが人と暮し始めたことの証拠として、ヨーロッパや西アジアの遺跡からは1万2,000年以上前のイヌの骨格が出土しています。日本でも約1万年前の縄文文化期の初めごろの遺跡から、埋葬されたと思われるイヌの骨が数多く発見されています。その後、弥生文化やオホーツク文化のなかでは、イヌは人びとの食糧にもされていたと考えられています。このコーナーには、弥生文化期のイヌの姿を復元した模型も展示しました。



■狩猟のパートナー

イヌは世界各地で猟犬として狩猟の手助けをしてきました。おもな獲物となる哺乳類は、動きが素早く力も強いので、人が素手で捕まえることは困難です。そこで、イヌは弓矢や銃、罠と同じよ



うな狩猟の道具として重要な役割を果たしています。狩猟におけるイヌの役割は、①獲物を探ること、②獲物の動きを操作すること、に大別できます。

ハンター(狩猟者)はイヌの鋭い嗅覚を利用して獲物の痕跡を探し、それをたどって獲物を探します。イヌイト(エスキモー)は、アザラシが呼吸のために海水の穴に接近してきたところを銜などで獲っていましたが、この猟をおこなうためにはアザラシの呼吸孔を探する必要があります。呼吸孔は雪に覆われていて発見するのが困難だったので、嗅覚が鋭いイヌに呼吸孔の探索をおこなわせました。

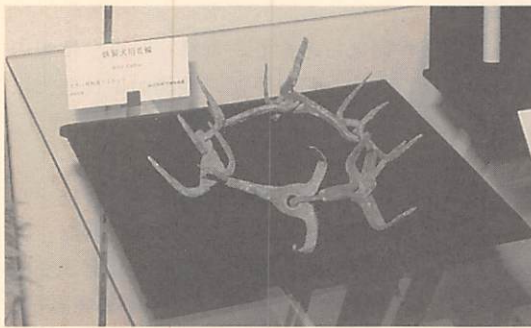
また、イヌはハンターが捕らえやすい場所に獲物を駆り出したり、逃げようとする獲物をその場に釘付けにしたりという具合に獲物の動きを操作し、狩猟の成功に貢献しています。アフリカ南部のカラハリ砂漠に住むサン(ブッシュマン)は、大型のカモシカ類などを、イヌの助けを借りて槍で狩ってきました。獲物の姿を見つけるとイヌが追いかけて闘い、イヌによって獲物が釘付けにされている間にハンターが接近し、槍を投げて仕留めます。アフリカ中部のコンゴ民主共和国(旧ザイル)に住むムブティという民族は、集団でおこなう弓矢猟「モタ」でイヌをもちいます。

この猟では5～10人以上の射手たちが森の一角をとり囲むように待ち伏せ、勢子が首に木製の鈴を付けたイヌをけしかけて獲物を藪から追い出します。射手たちは鈴の音や、獲物自身が立てる物音などから獲物の動きを判断し、待ち伏せ、先回り、追跡などをして射止めます。

■家畜を守る・誘導する ～牧畜～

牧畜生活をしている人びとのなかで、イヌには①オオカミやクマなどの捕食者から家畜を守ること、②人の指示によって家畜を誘導すること、といった2つの役割が与えられてきました。

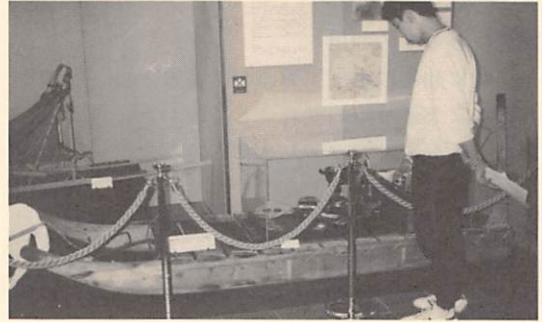
イヌはオオカミなどを発見して吠え立てたり、実際に闘ったりすることによって、捕食を防ぐことができます。トルコ共和国の遊牧民チョシル・ユルクは、ヤギ、ヒツジ、ウシ、ウマ、ラクダなどの家畜以外にイヌを飼っており、ヤギやヒツジの放牧に必ず伴います。イヌは特にオオカミを撃退するための番犬として役に立っており、闘うときに不利にならないように仔イヌのときに両耳を根元から切断しています。



また、欧米、オーストラリア、ニュージーランドなどでは、イヌに家畜を誘導させることによって管理の手助けをさせてきました。北欧からシベリアの全域にかけてはトナカイが飼育されていますが、スカンディナビア半島からフィンランド北部、ロシアのコラ半島にかけての地域に住んでいるサミ、西シベリアの北極海岸に広く分布しているネネツなどの民族はトナカイ群の管理のためにイヌを使用していました。イヌの役割は、移動の際にトナカイ群を誘導したり、遅れたり逃げ出したりしたトナカイを群に追い戻したり、散開した群を集中させたりするといったトナカイ管理の補助でした。

■雪原を駆ける ～そりの牽引～

シベリア、アラスカ、カナダ、グリーンランドの海岸や大河の流域では、荷物の運搬や人の移動



に犬ぞりが活躍していました。その形やイヌをそりにつなぐ方法は地域によってさまざまです。例えばアラスカやカナダ北部、グリーンランドなどに住むイヌイト（エスキモー）は、1頭ずつ別々の綱にイヌをつなぎ、イヌが横1列に広がってそりを引くような方法を使ってきました。また、カナダ北部のカショーゴティネ（ヘヤー）という民族は、数頭のイヌが縦1列に並ぶような方法でそりにつないでいました。チュクチ、コリヤークなどシベリア東部の民族は、イヌを縦2列に並ぶつなぎ方を使っていました。サハリン・アイヌ、ニプフ、ナーナイなどサハリンからアムール川流域の地方に住む諸民族は、1本の綱の先端に先導犬を、その後方に短い綱で交互に残りをつなぐ方法を使っていました。このコーナーでは長さ3.5mのナーナイの犬ぞりをはじめ、犬ぞりの牽引具、鞭などを展示しました。また、ネツリック・イヌイトとイヌとの伝統的なつきあい方を再現したビデオ“Tuktu and His Eskimo Dog(トゥクトゥとエスキモー犬)”を上映しました。

犬ぞりは伝統的な民族文化の中だけでなく、極地の探検家にとっても陸上の移動手段として重要な役割を果たしてきました。冒険家として著名な植村直己氏も北極圏での移動には犬ぞりを使っています。植村氏は、グリーンランドでイヌイトから犬ぞりの操作法を学び、イヌイトが使っているものと同じ型の犬ぞりを使って冒険に臨みました。このコーナーの一角には植村氏の冒険を紹介する部分を設け、植村氏がグリーンランドからアラスカまでの北極圏1万2,000キロを単独で走破した際（1974～1976年）に使用した犬ぞりと装備品を展示しました。

■素材としての利用

一般に動物の毛皮、骨、角、歯などは、衣類やさまざまな道具類の素材として使われてきましたが、イヌも例外ではありませんでした。

パプアニューギニア北部、セピック川流域に住むイワムという民族には、結婚の際に花婿側から花嫁側に贈物（財貨）を渡す慣習があります。いろいろな贈物のなかで、イヌの歯で作られた額飾り、胸飾りなどはもっとも高価な財貨とされています。



一方、シベリア東部のコリヤークやチュクチなどは、衣類の素材としてイヌの毛皮を使ってきました。イヌの毛皮は帽子の縁、コート^{コート}の襟や袖、裾に部分的に使われたほか、冬用の帽子や手袋をイヌの毛皮で作ることもありました。

人とイヌは地域や民族、時代によってさまざまに関わり方を変化させながら、長い間いっしょに歩いてきました。その多様な関わりは、イヌの祖先であるオオカミがもともと持っていた性質だけではなく、役割に適した品種を作り出したイヌの長所を十分に引き出すための訓練をおこなう、人のさまざまな工夫の結果として生まれてきたものです。

近年人の生活の変化などにより、伝統的なイヌの役割は減少しつつあります。しかし一方ではスポーツとしての狩猟や家畜誘導競技、犬ぞりレースなどが盛んにおこなわれ、災害救助犬、盲導犬、聴導犬、イヌを使った心理療法（アニマル・セラピー）など、日常的な生活の中でのイヌの役割も増えてきました。このような現在、伝統的な

「文化」としての人とイヌとの関わりを見直すことによって、私たちの身近にいるイヌをより詳しく知り、将来的に人とイヌ、あるいは他の動物とのつきあい方を考えていくことができるのではないのでしょうか。

* * *

本特別展は、約5,300名の方に観覧していただきました。身近な存在であるイヌがテーマだったためか、会場に置かれたノートには自分が飼っているイヌと比べながら感想を寄せられた方もいらっしゃいました。

また7月20日には講座「人とイヌとの関わり」を開催し、世界各地のりびととイヌとの関係を紹介するとともに展示資料の解説をおこないました。

■謝辞

本特別展の開催にあたり、資料、写真、情報の提供などにつきまして、下記の機関および個人にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

国立民族学博物館、野外民族博物館リトルワールド、市立函館博物館、函館市北方民族資料館、大阪府立弥生文化博物館、(財)大阪府文化財調査研究センター、植村直己冒険館、(株)文藝春秋、ペットライフ社、士別市立博物館、スウェーデン・ケンネル・クラブ、池谷和信氏、市川光雄氏、内山真澄氏、大塚和義氏、小田典子氏、萩田昇氏、葛野浩昭氏、児玉マリ氏、小長谷有紀氏、丹野正氏、寺嶋秀明氏、富澤勝氏、原ひろ子氏、松井健氏、松原正毅氏、吉田集而氏

(学芸課 中田 篤)



人、イヌと歩くーイヌをめぐる民族誌ー

平成10年9月19日(土) 13:30—17:00 当館講堂

第13回特別展の関連事業として3名の講師をお招きし、人とイヌのかかわりのさまざまな側面について講演していただきました。以下に各講演の要旨を紹介します。

■新妻昭夫氏（恵泉女学園大学／助教授）

「イヌの行動と社会：なぜ人間のコンパニオンになったか」

イヌがなぜ人のもっとも身近な存在になったのか、イヌの行動と社会の特徴から説明してみたい。まず、人と動物が身近な存在として一緒に生活する前提として、互いのコミュニケーションが可能である必要がある。イヌやネコなど一般に人に好かれている動物は、表情や姿勢などのボディ・ランゲージの基本的な部分が人と共通している。イヌの飼主はイヌの気持ちが理解できると感じているし、おそらくイヌはそれ以上に人の気持ちが理解できているだろう。

次にイヌの行動や社会の特徴をネコと比較してみよう。イヌもネコも食肉目という、野生では草食動物を捕食して生活するグループに属している。ネコ科の動物は、森林など見通しの利かない環境で進化してきた。そのため通り道で獲物を待ちかまえ、近づいてくると一気に飛びかかるといった待ち伏せ型の狩猟方法を取り、大型の獲物に対抗する方法としては自らも大型化する方向に進化してきた。ネコ科の動物は子育て中のメスを除けば基本的に単独生活者であり、社会的な関係のほとんどは母子関係である。このため人と接する際のネコの行動は仔ネコの動作がもとになっており、ネコは人に対して仔ネコが母親に甘えるのと同じ行動を示していると考えられる。

一方イヌ科の動物は草原などの開けた環境に生息してきたため、獲物を追跡して捕獲する追いかかけ型の狩猟方法をとる。また大型の獲物に対し、家族単位の集団で狩りをする方向に進化してきた。一般に哺乳類の子どもは成長後親元を離れるが、オオカミの子どもは成長後も親元に留まる場合がある。オオカミの家族は繁殖をおこなう一夫一妻のペアとこのような子どもによって作られて

いる。同じような家族集団を作る動物は、オオカミとその近縁種以外では人間くらいである。今から1万2,000年前ころに狩猟生活を送っていた人びとは、オオカミの仔を捕らえて連れ帰ることがあったのだろう。人間集団に加わったオオカミは自分の社会的な立場を把握したり、上位の者に対する振る舞いを身につけたりすることがすんなりできたと考えられる。また狩猟方法が基本的に同じなので、オオカミは人間の共同狩猟に効果的に協力することもできただろう。このように、共同狩猟という生活方法や基本的なコミュニケーションに多くの共通性があったことが、イヌと人がスムーズに一緒に暮らしはじめ、今もそれが続いている要因であると思われる。

■石黒直隆氏（帯広畜産大学／助教授）

「日本犬の系統について」

日本では、約9,000年前の縄文早期の遺跡を始め、各地の先史文化の遺跡からイヌの骨が出土している。これらの犬骨を分析することにより、在来日本犬の起源や成立過程を明らかにし、それによってイヌとともに移動してきた人や文化の移動、変遷の一面を明らかにしていくことができる。と考えられる。

これまで、在来日本犬の血液^{たんぱく}蛋白の解析から、北海道犬と沖縄の在来犬である琉球犬、本州と朝鮮半島の在来犬がそれぞれ比較的近いタイプであることが示された。この結果から、縄文時代には北海道から沖縄まで同タイプのイヌが分布していたが、弥生時代に渡来人とともに大陸系のイヌが本州に入り、在来犬と交雑したという仮説が提示されている。

また、各文化期の犬骨の形態的特徴から、縄文時代のイヌ（縄文犬）と弥生時代のイヌ（弥生犬）は異なるタイプであること、在来日本犬の原型は中世ごろにできたことが示唆されている。このように時代によって形態が異なるのは、各時代に大陸から移入されたイヌがそれぞれ日本在来犬に遺伝的に影響を与えたためと考えられる。

近年、イヌの品種間あるいはイヌとオオカミと



の系統関係について、遺伝子（ミトコンドリアDNA）をもちいた解析がすすめられている。この方法をもちい、先史文化期の犬骨に残存する遺伝子から系統関係を明らかにしようと考えた。

このため、まず系統の基準として在来日本犬を中心とした180頭の血液からミトコンドリアDNAを取り出し、遺伝子のデータベースを作成した。この過程で同じ品種のイヌ同士にも遺伝的な違いがある一方で、異なる品種を遺伝的に区分する明確な違いがないことが示された。結果として、180頭のイヌは品種とほぼ無関係に28のタイプに分けられた。

先史時代の犬骨として、縄文文化期、弥生文化期、オホーツク文化期などの遺跡30ヶ所から得られた145サンプルの分析を試み、そのうち74のサンプルからミトコンドリアDNAを取り出して解析することができた。その結果、現生犬の28の遺伝子タイプのうち、青森県以南の本州ではM2型が多くみられた。また、関東から北海道、サハリン、千島にかけてはM5型がみられた。これらの地域による違いが何を示しているのかについて、今後サンプル数を増やし、ロシア・沿海州など大陸部のイヌの遺伝子分析を加えるなどして明らかにしていきたいと考えている。

■池谷和信氏（国立民族学博物館／助教授）

「イヌとヒトの絆^{きずな}—北方と南方の民族誌から—」

これまでイヌとヒトとのかかわりについて、体系的に把握されてこなかった。この報告ではイヌを「人の生活を映す鏡」としてとらえ、世界各地のイヌとヒトとのかかわりについて現地調査の結果を中心に紹介する。

まず、世界各地のイヌの役割に関する資料から、人びととイヌとのかかわりの歴史についての一般的傾向を示す。狩猟犬は世界各地で獲物の動きを止め、ハンター（狩猟者）が仕留めるのを助ける役割を果たしてきた。牧畜はアフリカ、中央アジア、東アジアなど広い範囲でおこなわれてい

るが、ヒツジなどを誘導する牧畜犬の利用はヨーロッパとその影響を受けた地域でのみ発達した文化である。イヌは運搬用の役畜としての役割も果たしていたが、北方地域で広くみられる犬ぞりの牽引のほか、北アメリカではイヌに直接荷物を背負わせる方法ももちいられた。また、世界各地でイヌを神の生贄^{いけにえ}とすることで悪霊から身を守るといった習慣がみられた。素材としてのイヌの利用は地域性が高く、イヌの歯を装飾品としてもちいるのはパプアニューギニア、ハワイ、南アフリカなどの地域に限られていたし、イヌの毛を織布の材料としていたのは北西海岸インディアンだけであると思われる。

次に、個別の民族誌のなかでイヌの役割をみてみよう。アフリカのサン（ブッシュマン）は、伝統的にイヌを連れて移動しながら狩猟をおこなってきた。小型の獲物はイヌだけで捕らえ、ゲームボックスなど大型の獲物はイヌが動きを止めている間にハンターが槍で仕留める。狩猟が成功するとイヌにも肉が分配されるなど、良いパートナー関係が保たれている。シベリア北東部では先住民チュクチがトナカイを誘導するのにイヌをもちいており、ここでもイヌは人の身近な存在となっている。

これらのようにイヌをパートナーとしてもちいる地域がある一方で、中国東北部、東南アジア、西アフリカなどには犬肉を食べる文化も存在する。近年ヨーロッパを中心とした動物愛護思想がこれらの地域にも影響を与え、犬食文化は危機的な状況にあるが、このような価値観の対立する状況も民族学における現代的課題の一つである。

街角や公園の注意書きからもわかるように、日本ではイヌの糞の不始末や捨犬・野犬をめぐる問題が跡を絶たない。この背景には、ペットブームといった社会現象やそれに伴うペット市場、消費者の動向など、現在の日本の文化的状況があると思われる。ここでもイヌは、「人の生活を映す鏡」となっているわけである。

* * *

本講演会には網走市とその近郊を中心に多くの参加者があり、各講演に熱心に聞き入っていました。（学芸課 中田 篤）

ウイルタのお人形づくり

講師：北川アイ子氏
(資料館ジャッカ・ドフニ館長)

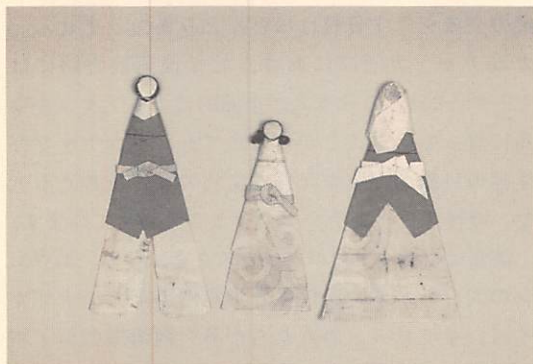
7月29日に資料館ジャッカ・ドフニの館長北川アイ子氏を講師にむかえ、昨年に引き続き「ウイルタのお人形づくり」を開催しました。

ウイルタ語でお人形は「ホホ^{ホホ}xoxoo」といい、紙や布、葉で作られたものがありました。北川氏は少女時代を現在のロシア、サハリン州ポロナISK(敷香)郊外の「オタスの^{もり}杜」とよばれた所で過ごしました。その当時は布もそれほど豊富にはなかったため、講習会で作ったお人形(約18cm)よりも少し小さく、つめものも少なかったようです。眠るときには、壁にぶらさげて大事にしていたということです。

本講習会には、夏休み期間中ということもあって、小学生や本州からの参加者もあり、みなさん楽しんでお人形づくりに励んでおられました。

なお、作り方については本誌第27号(友の会だより第25号)をご参照下さい。

(学芸課 笹倉いる美)



上：講習会の様子(左が北川アイ子氏)。
下：昭和16年頃のウイルタのお人形(頭と髪が布製、体は紙製)。服部健氏収集、当館蔵。

さかなをだますルアーづくりー

講師：中田 篤(当館学芸員)

この博物館クラブでは、世界各地で漁撈に使われてきた道具であるルアー(疑似餌)を製作しました。最初に北アメリカ大陸の北西海岸、北東アジアなどの地域でもちいられていた伝統的なルアーとその役割について解説しました。次に現在のスポーツフィッシングでももちいられているルアーについて説明し、その一種「プラグ」の製作をおこないました。プラグは小魚や昆虫などを模したルアーです。柔らかくて加工がしやすいバルサ材をもちいると、実際に釣りに使えるルアーを簡単に作ることができます。

材料として長さ9cm、幅3.5cm、厚さ0.5cm程度のバルサ材を2枚と、針金、釣り用の鉛のおもりを用意しました。まず、ラジオペンチなどを使って針金におもりを取り付け、ルアーの心棒を作ります。次に心棒をバルサ材で挟み、木工用ボンドで接着します。しっかり接着したら、紡錘形になるようにカッターで角を削って形を整えます。表面の凸凹など細かい部分は紙やすりをかけて滑らかにします。最後にアクリル絵の具で模様を描いて完成です。

今回は、小学生とその父兄を中心に多数の方に参加していただきました。特に低学年の子どもにとっては、なまりの位置を調節したり、全体を削ったりする作業が難しかったようです。また最後の色付けでは、細かい模様を描こうとして苦勞する姿もみられました。完成までに予定の時間を過ぎてしまったものの、全体としては好評のうちに終了することができました。



ロシア・カムチャツカ州における調査概報

北方民族博物館学芸課長 渡部 裕

今回の海外民族調査はロシア共和国カムチャツカ州の先住民文化を対象に実施しました。カムチャツカ州はロシアの北東部、チュコト半島から南部に延びた半島部を中心に、およそ北緯51度から65度の南北に1,600km、半島部の最大幅は450km、総面積は472,300km²と日本の総面積の約1.25倍の広さです。半島南部は比較的温暖で針葉樹や広葉樹などの森林資源にも恵まれ、カムチャツカ川をはじめ多くの河川にサケ類が遡上することでも知られています。陸上動物ではヒグマは現在でも各地に多く生息し、サケの遡上シーズンには集落のはずれでその足跡を目にすることができます。オオツノヒツジ、キツネ、クロテンもよく知られた哺乳動物です。海獣類ではかつてアザラシ類、トド、シロイルカや、より大型のクジラ類の回遊が多くみられ、東海岸ではセイウチ、キタオットセイ、ラッコなども多く生息していました。

このような環境のなかでカムチャツカ州の先住民は豊富な資源を利用してきました。南部やカムチャツカ川流域には、サケ類の漁撈や海獣狩猟を行ってきたイテリメンが、北部にはコリヤークが居住してきました。コリヤークにはおおまかにいって生業形態を異にする2つのグループ—サケ類や海獣類に依存する海岸コリヤークとトナカイ飼育を行ってきたトナカイコリヤーク—が知られています。また、カムチャツカ半島中央部にはトナカイ飼育民であるエヴェンが居住してきました。ロシアの研究者の見解によれば、この地域のエヴェンは、東シベリアに広く居住してきたエヴェンの一部が、およそ150年前に故地からチュコト半島を通りカムチャツカ半島に南下してきたグループの子孫とされています。

今回は主として3つの目的をもって調査を実施しました。ひとつは明治期以前に行われていた日本列島とカムチャツカ半島の交流の痕跡をさぐることです。カムチャツカ半島南部の遺跡から江戸時代の代表的銭貨「寛永通宝」が出土していることから、かつて千島列島を介してなんらかの交流があったと考えられています。

ふたつめは、今回の調査の中心になりますが、



先住民の伝統的文化と現代の文化のあり方を調査することです。さらに、もうひとつの目的は明治以降に展開された日本人による北洋漁業とカムチャツカ先住民の関係についてです。明治30年代から日本人漁業者がカムチャツカに渡って現地の沿岸でサケ漁を行い、陸上施設で塩鮭や鮭の缶詰を製造した歴史はよく知られているところです。昨年参加した調査（文部省科学研究費補助金国際学術研究「カムチャツカ半島民族芸能調査／コリヤークとアリユート」研究代表者：小樽商科大学教授大島稔氏）で、カムチャツカ半島北部東海岸出身のコリヤークの男性から聞いた「コリヤークは日本人が来てから海でサケを捕ることを覚えた」という言葉は日本人漁業者と先住民の交流を示すものといえるでしょう。日本側の歴史資料にはカムチャツカ半島における日本人漁業者と先住民の交流を示す資料はほとんどみあたりません。カムチャツカ沿岸における北洋漁業最盛期には19,000人ほどの日本人が季節的にカムチャツカ半島に渡っていたことから考えても、カムチャツカ半島の日露交流史や先住民文化の変化を考える上で、今後の大きなテーマのひとつと考えています。

調査は州都ペトロパブロフスクをはじめ、エヴェンの人たちが多く居住する半島内陸部のアナブガイ村、イテリメンの人たちが多い西海岸のティギル村、そして同じく西海岸でコリヤークの人たちが比較的多いバラナ市で行いました。物質文化に関してはペトロパブロフスク、エツソ、ティギル、

パラナ、ミルコヴォの6ヶ所の博物館や、展示室に収蔵展示されている資料の調査を行い、現代のサケ漁の実態や漁撈具を知るためにサケ漁の現場も訪問しました。

また多くの文化伝承者にお会いし、インタビュー形式による聞き取り調査を行い、伝統的文化のあり方や現代社会における社会・経済的側面を調査することができました。

詳細な報告は改めて行うこととし、ここではその一端をご紹介します。

■サケ漁

サケ漁はカムチャツカの先住民の人びとにとって今日でもきわめて重要な経済的役割をはたしています。漁法は10-30mの長さの刺網を川岸から流れの中に設置する方法が主流ですが、伝統的なサケ漁に用いられていた魚止め柵と箱罟あるいは籠罟を組合せた築は現在でもアナブガイとパラナで使われています。捕獲されていた魚種はサケ属ではシロザケ、カラフトマスのシーズンは終わりをむかえ、ギンザケが捕れはじめていました。またロシア語でgoletsと呼ばれるホッキョクイワナも捕獲されていました。

これら捕獲したサケ類は冬に備えた食料として加工されています。かつて魚卵は乾燥して保存食とされていましたが、今日では塩漬けのイクラとして日常的に食べられています。イクラの加工は北海道の加工業者と同じく木枠に張った網の目に筋子をこすりつけて行う方法が広く普及しており、この方法はかつて北洋漁業時代に日本人から伝えられた可能性があるのではないかと考えています。サケ類の魚体の加工は、伝統的にはいくつかに縦に切りさばいたものを干し柵で天日乾燥していましたが、現代では三枚におろしたものを塩水に漬けた後、燻煙小屋を利用して燻煙・乾燥により干しサケを作っています。また、フィッシュ・キャンプではテントを利用して燻煙・乾燥が行われており、屋外の干し柵では主にイヌの餌として天日干しが行われています。ことに西海岸では雨や霧雨の天候が続き、屋外の干し柵では乾燥が進まず、蛆の大量発生にみまわれていました。

カムチャツカにはアイヌの伝統的サケ漁具である鉤鉞（マレク）と大変よく似た漁具が使われていたことが知られていますが、その実態はまだよく分かっていませんでした。今回の調査ではカムチャツカ半島では伝統的に鉤鉞が使われてきたことがあきらかになりました。

さて、カムチャツカにおける先住民の人びとの

多くは集団化政策によって、1930年代を中心に生まれ育った集落を離れ、地域の拠点集落に集められてコルホーズに所属してきました。1980年代後半のペレストロイカ以後、独自の経済活動を強いられるなかで経済的に困窮した状況におかれています。北部の村々では都市部への出稼ぎや移住などで人口が減少しています。ティギル村では電気が使える時間が限られ食事時のみになっていましたし、燃料不足で車やモーターボートの利用がほとんどできない状況がみられました。

経済的打撃はトナカイ飼育に大きくみられ、かつてコルホーズ単位で3つか4つのトナカイ群（1,000頭から1,200頭）を所有してきた状況から、様々な要因によって現在では1つのトナカイ群を維持するのが精一杯という状況になっています。

■北洋漁業の記憶

かつて行われていた北洋漁業時代の記憶は日本人のなかでどれだけ伝えられているでしょう。断片的なものではありますが、北洋漁業時代の日本人に対する記憶が先住民の人たちの社会で語り伝えられています。「カワサキ」という言葉が残されていますが、これはバイクメーカーのカワサキではなく、沿岸で用いられた小型の船舶「川崎」のことですし、「日本人は清潔で働き者だ」といった好ましいイメージが残されていることも感じました。しかし、胸が痛む歴史も記憶され伝えられています。1950年代に、かつて日本人と親しかったというだけでスパイの嫌疑により逮捕され処刑された先住民の人たちがいたのです。

基本的には単独で行った調査ではありませんが、カムチャツカ生態学・資源管理学研究所の協力のもと、ペテロパロフスク以北の調査には同研究所のヴィクトリア・ペトロシヨヴァ教授の同行が得られたことから、短期間ながら多くの情報を得ることができたと考えております。



コリヤークのサケ干し柵と貯蔵庫／パラナ

調査概報

北西海岸インディアンの
開発人類学的研究

北アメリカの北西海岸インディアン社会は、18世紀後半にロシアやヨーロッパからの航海者との接触が頻繁になり、徐々に世界経済の中に組み込まれ、その影響をうけて大きな変貌をとげてきました。本研究は、文部省科学研究費補助金（北海道東海大学・岡田淳子教授代表／国際学術研究・課題番号10041029）によるもので、北西海岸インディアンの一グループであるツィムシャンの住むアラスカ州メトラカトラ村において現地調査を実施、開発人類学の視点から彼らの歴史、現況および今後の展望について資料を収集し分析しようとするものです。

今夏、岡田淳子教授をはじめ岡田宏明当館館長、金沢学院大学益子待也教授、アラスカ大学サウスイースト校プリシーラ・ショルティエ教授が現地調査を行い、筆者も7月23日から約1ヶ月間この調査に参加したので、概要を報告します。

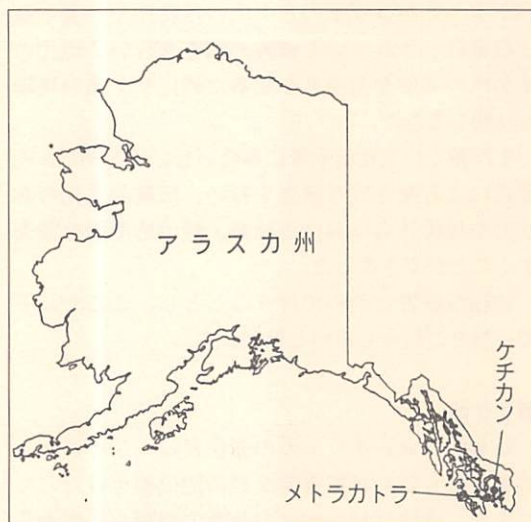
■メトラカトラについて

東南アラスカのケチカン市に近いアネット島にある（ニュー）メトラカトラ村は、1887年にウィリアム・ダンカン(William Duncan)牧師が伝統にとらわれない理想的な社会をめざして、カナダのブリティッシュコロンビア州北部から約800人のツィムシャンたちを連れて移住し、形成されました。ダンカン師が合衆国政府と掛け合い、この村をアラスカ州で唯一のインディアン保留地(Reservation)として認めさせたことから、議会や税制度などをはじめ政治・経済・社会面で他の自治体とは異なる制度がしかれています。

ここでは、早くから水産加工業や林業等で日本の企業との取引があり、技術援助を受けながら、住民が主体となって経済発展の道を歩んできました。近年のサケ価格の下落や第三国からの輸入木材の増加による営業不振などの問題も抱えているものの、ここ数年は観光に力を注ぐなど新たな取り組みも行われています。

■今回の調査内容

現地では、まず村長と村議会の主要メンバーや



村の有識者への挨拶、水産加工場、サケ孵化場、ダンカン博物館、高齢者ホームなどの訪問を通して村の概況を知るとともに、役場や図書館での文献閲覧やコピー等も行いました。筆者は、観光と工芸品の制作・販売についての調査を分担しましたので、実際に村内ツアーに参加してビデオ・写真での記録を行いました。また、近年の観光客の動向等についてツアー・マネージャーやガイド兼ダンス・チームのリーダーたちから聞き取りを行ったり、村内のギフトショップで工芸品の種類・価格・制作者の調査を行いました。さらに、ケチカンやシアトルなどの都市部でも活躍しているメトラカトラ出身の著名なアーティストについて、ギャラリーでの調査や出版物の収集をとおして把握に努めました。

現在はデータを整理中ですが、本研究は次年度も行われますので、調査の成果は後日しかるべき機会に報告をする予定です。

(学芸課 齋藤玲子)



集会所「ロングハウス」内で説明を受ける観光客

第6回

環オホーツク海文化のつどい

於：紋別市文化会館

上記シンポジウムに参加しましたので、そのなかのうち北方民族とオホーツク文化に関する講演・報告について簡単に紹介します。

山浦清氏（立教大学）の講演「考古学から見た環オホーツク海文化交流ーオホーツク文化を中心としてー」では、オホーツク文化研究の現状が紹介され、オホーツク文化を担っていた人びとを現存民族と対比しようとする研究があるが、それにはさらなる検討が必要であると述べた。そしてオホーツク文化を含み、大陸側のオホーツク海沿岸にまで拡がるとする「環オホーツク文化圏」では、土器や一部の骨角器、銛頭、鈎銛等に共通性がみられ、その文化圏の成立要因としてアムール川中下流域の動向が重要であると指摘した。

岩崎奈緒子氏（滋賀大学）の講演「近代の胎動期におけるエトロフ・クナシリのアイヌ社会」では、「人別帳」などの文献資料から同地域のアイヌ社会や経済活動の再構築を試みた。また幕府や松前藩との関係が、対ロシア通商などともからんで江戸寛政期から幕末にかけてどのように変化していったのかを解釈した。

研究報告では岸上伸啓氏（国立民族学博物館）が「北方諸民族の人名と命名について～エヴェン、コリヤーク、ユピック、イヌイトの比較」で4民族の人名と命名法の事例を紹介し、名前と靈魂との関係などは環極北地域に共通してみられる文化的特性であるとした。

小野裕子氏（北海道大学）は「道北のオホーツク文化の特性～礼文島を中心に」で香深井A遺跡の堅穴住居址と魚骨層との関係における分析から、サハリンから渡ってきたオホーツク文化は礼文島を含む道北部で生業活動に関わる変容を遂げた後、オホーツク海沿岸をつたって道東部へ拡がっていったとした。

今回のシンポジウムは聞いている側はもちろんのこと、発表者にとっても時間が足りなかったのではないと思われるほど、非常に興味深い講演・報告ばかりでした。

（学芸課 稲垣はるな）

今号の表紙－女性用パーカー

コリヤークは冬の衣類を作るのにトナカイ皮、特にまだ毛が細くて柔らかく、密集して生えている幼獣のものを主に女性・子供用に利用してきましたが、これで作った衣類は暖かいだけでなく、非常に軽いという利点がありました。トナカイ以外の動物では毛足の長いイヌ、キツネ、オオカミ等の毛皮が縁飾りに用いられました。写真のパーカもトナカイ皮製で、袖口などにイヌ皮製の縁飾りがつけられています。このパーカは現代のものですが、フードと前垂れのついた伝統的な形の女性の上衣で、毛の側を内側に、皮側を外側にして赤く染められています。また、様々な色のビーズを使った2本1組の房や、円形の刺繍などを組み合わせて幾何学的な装飾が施されています。前垂れの部分はトナカイの脚の皮で作られていて、冬の冷たい風から顔を覆うようにして守るためにつけられています。

みんぞく こうこ はくぶつかん
in 北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 6/29 オホーツク文化に焦点をあてた歴史シンポジウム「オホーツク歴史浪漫」：7/4・5に網走で開催/AS
- 7/7 旧人の石器、道内で初出土：旧人が北回りで大陸から渡来した可能性あり、新十津川不動坂遺跡/AS
- 7/12 アイヌ文化紹介へ 交易船の復元着々：米スミソニアン博物館で特別展準備/D
- 7/17 続縄文時代のクマの彫刻品出土：全身かたどった石製品、芦別市滝里安井遺跡から/D
- 7/25 ロシア北方の少数民族、北見で伝統芸能公演：北見市と姉妹都市のサハリン・ポロナイスク市から/Y
- 7/26 二風谷の文化財、一堂に：沙流川歴史館オープン、平取町/D
- 8/3 豪先住民アポリジニが平取町を訪問：アイヌ民族と交流を深める/T
- 8/26 アイヌ語辞典をCD-ROM化：全国初、萱野氏が8000語の肉声吹き込む/T
- 9/7 「カムイの風」初披露：アイヌ語のオリジナル曲を東京の合唱団が披露、北見で/D
- 9/13 伝統音楽などを競演：アイヌ民族と豪州のアポリジニ、豊富・旭川でコンサート/D
- 9/19 民族尊重しあう関係を：日本とサハリンの先住・少数民族が参加して「マイノリティ・フォーラム98・イン・サハリン」開催、ユジノサハリンスク市で/D

*AS：朝日新聞、D：北海道新聞、T：北海タイムス
Y：読売新聞
複数紙掲載の場合は扱いの大きい方を紹介しています。

■寄贈資料紹介

・ナイフほか：札幌市の谷本一之氏からサハのナイフ、物入れ、チャーム、ユカギールの白樺樹皮図、コリヤークの手袋各1点が寄贈されました。



コリヤークの手袋

・嗅ぎたばこ入れ：中国北京市の劉慶柱氏から嗅ぎたばこ入れ1点が寄贈されました。

■執筆・出版社から贈呈を受けた書籍等

- ・大林太良ほか編 1998 『民族遊戯大辞典』大修館書店
- ・大林太良 1998 『世界の神話をどう読むか』青土社
- ・中国大百科全書出版社 1997 『考古学集刊 11』
- ・菅原政雄ほか 1998 『北見の町並み・景観深訪—我がまち再発見—』『北見叢書』刊行会
- ・富山民俗文化研究グループ編 1998 『とやま民俗文化誌』
- ・江守五夫 1998 『婚姻の民俗 東アジアの視点から』吉川弘文館

■主な来館者

6/25 帯広市国際交流センター
アンネリース・ルワレン氏

- 7/24 芝浦工業大学理事長
石川 洋美氏
- 7/26 中国社会科学院考古研究所
副所長 劉 慶柱氏
ほか5名
奈良国立文化財研究所
玉田 芳英氏
- 8/5 元官房副長官 石原 信雄氏
- 8/27 特命全権大使 国際貿易・経済
相当兼地球環境問題相当兼外交
政策広報担当大使
木村 崇之氏
- 9/23 ハバロフスク州立博物館
館長 Nickolai I. Ruban氏
副館長 Larisa V. Korneva氏

■その他の行事報告

- 9/12(土) 博物館クラブ
「土器づくり(1)」
- 10/14(水) 講習会
「インディアンのビーズ細工」

■行事案内(11~1月)

- 11/12(木)、13(金)
第13回北方民族文化シンポジウム
テーマ「北方の開発と環境」
会場：網走セントラルホテル
- 11/18(水) 講座
「トーテムポールと観光」
- 11/25(水) 講座
「映像に見るクマと北方民族
—クマに対する信仰—」
- 11/28(土) 博物館クラブ
「とんぼ玉づくり」
- 12/12(土) 博物館クラブ
「植物で染め物をしよう」
- 12/23(祝・水) ロビーコンサート
- 1/23(土) 博物館クラブ
「さかなの料理
—ひものづくり—」

■観覧者動向(7~9月)

	(名)	
	常設展示	特別展示
7月	5,108	1,081
8月	7,579	2,817
9月	4,918	1,387
計	17,605	5,285

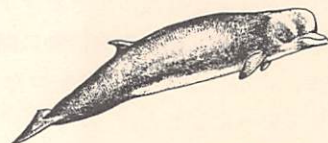
■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会平成10年度会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をとおして北の文化を紹介しています。年会費は3000円。すでに会員になられた方は、お知り合いにもご紹介ください。詳しくはお問い合わせを。

■編集後記

網走は捕鯨基地としても知られたところですが、先日クジラの解体をみるチャンスに恵まれました。港に曳航されてきた重さ10トン以上もあるツチクジラを解体場にひきあげるために、現代では太いワイヤーとウインチを使っています。伝統的にクジラを捕獲していた海獣狩猟を行う北方民族は、そうした作業もすべて人力で行っていたのだと思うと、その労苦を想像して感慨深いものがありました。

(稲垣)



ツチクジラ